

北海道文教大学 人間科学部 こども発達学科

2011（H23）年度

点検・評価書

2011（H23）年12月27日

4 教育内容・方法・成果

◎ 目標・方針

「教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針」

(1) 教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか

・ 学士課程の教育目標

・ 修得すべき学習成果（学位授与の要件）

こども発達学科においては、こどもの心と体の仕組みや発達を実践的に学び、食育や保健、社会などの広い範囲における学術の研究・教育を行い、高度にして最新の専門的知識・技術を修得した保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭を養成する。

こども発達学科は、乳幼児に対する理解を基盤として、児童を含めた発達支援を実践できる人材の養成を実現するために、次の三つの履修コースを推奨している。

- ① 幼稚園教諭・保育士・小学校教諭
- ② 幼稚園教諭・保育士・特別支援学校教諭
- ③ 幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援学校教諭

各コースの卒業修得単位数は、下記のとおりである。

こども発達学科取得免許と卒業修得単位数

取得免許 学年	幼稚園・保育士・小学校	幼稚園・保育士・特別支援学校	幼稚園・小学校・特別支援学校
2年生	152単位	139単位	147単位
1年生	153単位	140単位	145単位

①のコースは、幼小連携に対応できる実践的な人材を養成する。

②のコースは、幼稚園・保育所において、発達障がい等に対応できる人材を養成する。

③のコースは、主として小学校教諭・特別支援学校教諭を目指す人材を養成する。

1年生と2年生で単位数が異なるのは、平成22年度に保育士に係わる教育課程が変更になったことによるものである。

こども発達学科は、乳幼児から児童までを対象として、発達に対する理解を深め、援助技術を身につけた者に学位を授与する。

(2) 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか

・ 教育目標に基づく教育課程の編成

こども発達学科においては地域社会における多様な保育・教育ニーズに応え、幼稚園

から小学校へのスムーズな接続の問題や、障がいを持つ子どもや扱いの難しい子どもへ専門的なケアをすることができ、地域における保育・教育のアドバイザー、コーディネーターとして活躍する人材の育成、高度な能力をもつ保育者・教育者の養成を目的としている。

幅広い人格の基礎を築くための教養科目を土台とし、地域の保育・教育施設や学内に設置される子育て学校支援センターとの連携からの学びを大切にしながら専門基礎科目により本学科の目指す人材の骨格を形成し、その上に乳幼児発達科目、乳幼児教育・保育科目により肉付けを行い、子ども教育を主選択とする学生は小学校教諭免許取得につながる教育科目を履修し、子ども支援を主選択とする学生は特別支援学校教諭免許取得につながる教育科目を履修して学ぶことができる。

その目的を達成するために、教育課程は①教養科目、②専門基礎科目、③専門科目、の3群により構成される。教育課程編成においては①子どもの発達とその支援に対する高い知見と高度な実践的能力が効率よく身につけられること、②地域の保育・教育を担い、その分野のアドバイザー、コーディネーターとしての実力を身につけること。③人間科学部の特性を活かし、人間理解に関わる広範な知識や態度を修得できること。④学生の希望と志向に応じて各種の資格・免許が無理なく取得できることについての配慮を行った。

- (3) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針が、大学の構成員（教職員および学生等）に周知され、社会に公表されているか

・教育目標、学位授与方針および教育課程の編成方針の社会周知方法

こども発達学科は、平成25年度に完成年度を迎える。教育目標、教育課程の編成は、設置認可時の方針を遵守し、その内容はホームページ及び学生便覧等に記載して、社会的周知を図っている。

- (4) 教育目標、学位授与方針および教育課程編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか

・教育目標、学位授与方針および教育課程の編成方針の定期的検証

前述のように、こども発達学科は完成年度の途上にあるため、教育目標、教育課程の編成方針の定期的検証については、毎年文部科学省に設置計画履行状況（授業科目に関する概要等）を報告している。また、学科内においては、完成年度に向けて教育課程の編成について、学科長・教務委員を中心として学科会議で検討を重ねている。

○ 概況

設置計画では、子ども教育を主選択とする学生は小学校教諭免許取得につながる教育科目を履修し、子ども支援を主選択とする学生は特別支援学校教諭免許取得につながる教育科目を履修して学ぶことができることとなっていた。教育課程の学年進行に伴い、当初の二つのコース選択だけでは困難な事態が生じてきた。特別支援学校教諭を志望す

る学生が基礎免許を幼稚園教諭とした場合、教員採用試験では採用枠がほとんどないという現状があるため、特別支援学校教諭を志望する学生においては、小学校を基礎免許とする履修方法を認めることとした。

こども支援を主選択とする学生は、特別支援科目を履修し、幼稚園教諭・保育士を志望する者である。

1 現状の説明

「教育課程・教育内容」

(1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか

・学科設置の趣旨目的

人材育成の目標に鑑み、学生が十分な学士力を備え、人間性豊かで思いやりがあり、保育・教育の現場や地域支援の先頭に立って活躍する問題解決能力の高い人材として育成されるために以下の点に留意して教育課程の編成を行った。

各項目に対応する教科目は以下のとおりである。

① 豊かな人間性の涵養

こどもの心を育み、人間性を育てるための豊かな人間性の涵養。

A. 他学科、他学部との連携による科目

幅広い分野についての専門的知見を得て豊かな人間観の基盤を築くため、人間科学部の既設学科である健康栄養学科、理学療法学科、作業療法学科及び看護学科並びに外国語学部との連携による科目。

教養科目：「北国の生活と健康」「異文化間コミュニケーション論」「食生活論」「生命科学」「物理学」「環境と科学」「英語コミュニケーション」

総合科目：「生理学」「公衆衛生学」「救急医学」「食べもの論」

B. 保育・教育関係の諸科目

保育士資格、幼稚園教諭、小学校教諭免許取得のための科目群。

② 社会性を育てる科目

こどもをめぐる親、家族、近隣社会、あるいは保育・教育の現場における上司、同僚などとの間に温かい社会的関係を構築できる社会性を養う。

教養科目：「日本国憲法」「現代社会と福祉」「現代社会論」「異文化間コミュニケーション論」

専門基礎科目：「子育て支援ネットワーク論Ⅰ・Ⅱ」「社会福祉」「児童福祉」

保育方法の理解：「保育内容Ⅱ人間関係1・2」

小学校、幼稚園教職科目：「道德教育の研究」

③ 専門性を育てる科目

こどもの心と体の発達に関する高度かつ最新の知識、技術を修得し、保育、教育等の分野における総合的視点をもつための科目。

教養科目：「心理学概論」「倫理学」「現代生活と福祉」

専門基礎科目：「こども学原論」「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」「保育原理Ⅰ・Ⅱ」
専門科目：「教育制度論」「こどもの発達と幼小連携」「特別支援教育総論」
各種免許・資格取得のための専門基礎科目・専門科目

④ 地域・多職種との連携

幼稚園、保育園、小学校、特殊支援学校、各種児童福祉施設など、関連する保育・教育機関等諸機関との連携、チームワーク、ネットワークを形成し、人間関係を調整する能力の育成。

教養科目：「現代社会論」「現代生活と福祉」「食生活論」

専門基礎科目：「子育て支援ネットワーク論Ⅰ・Ⅱ」「病弱者の心理・生理・病理」

専門科目：「地域活動論」「国際協力論」「生涯教育論」

各種免許・資格取得のための専門基礎科目・専門科目

⑤ 倫理性

社会人、保育者、教育者として、こども・児童・生徒の人権と倫理を尊重し、守秘義務を遵守し、保育者・教育者としての役割、責任を果たすことができる能力の育成。

教養科目：「日本国憲法」「倫理学」

専門基礎科目：「教職原論」「保育原理Ⅰ・Ⅱ」「道德教育の研究」

専門科目：「生徒指導の研究」

⑥ 科学性

自ら問題意識、課題意識を持ち、批判的、科学的に思考し、主体的に学習し、自ら判断して行動できる科学的思考・発想能力の養成。

教養科目：「心理学概論」「生命科学」「物理学」「環境と科学」

専門基礎科目：「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ」「理科概論」「数学概論」

専門科目：「こども学総合演習Ⅰ・Ⅱ」「生理学」「公衆衛生学」

⑦ 国際性

外国語学部との連携により国際的視野を広め、外国人との間のコミュニケーション能力を養う。

教養科目：「英語コミュニケーションⅠ,Ⅱ」「中国語Ⅰ,Ⅱ」「ロシア語Ⅰ,Ⅱ」「異文化間コミュニケーション論」

専門基礎科目：「外国語活動指導論」「教育課程概論」（「教育課程論」には各国の教育課程の内容を含む）「教育制度論」（「教育制度論」には各国の教育制度の内容を含む）

専門科目：「国際協力論」

・必修科目、選択科目、自由科目の構成とその理由

希望する免許・資格を取得しやすくし、学生の過重な負担を避けるために教養科目、専門基礎科目以外の科目についてはその多くを選択科目とし、学生の免許・資格取得の状況に適合する形で教育課程を編成した。ただし、各免許・資格の取得に必要な科目については免許・資格取得のための必修科目となることは勿論である。

専門基礎科目において設定されている必修科目については、いずれも本学科の学習の基礎となるものであり、当該科目に関わる免許・資格を取得しない学生にあっても必要

な科目であるとの認識により必修科目として設定した。

・履修順序（配当年次）の考え方

4年間の体系的かつ効率的な学びを実現するため、基本的に1、2年時に保育士資格、幼稚園教諭1種免許状取得のための科目群を配置し、その基礎の上で3年次を中心に4年次にかけて小学校教諭1種免許状、特別支援学校教諭1種免許状取得のための科目群を配置した。1、2年時を基礎的課程、3、4年時を発展的課程として区別することなく、4年間トータルで総合的な学修が可能となるように配慮されている。

(2) 教育課程の編成・実施方針に基づき、学士課程に相応しい教育内容を提供しているか

・教養科目の教育課程編成上の位置づけ

科目区分の設定、各科目区分の科目構成の項において記述したように、教養科目は人間の発達とその支援、地域における保育・教育への支援を学ぶ者としての幅広い教養・素養を養う科目として、位置づけられている。健康栄養学科、理学療法学科、作業療法学科、看護学科が存在する総合的な人間科学部に所属する学科としての特性を活かし、各学科の授業科目の中から本学科の学生が学ぶにふさわしい科目を精選して配置している。

○ 概況

学科設置から2年を経過し、教育課程は当初の計画どおりに進行している。昨年度に保育士に関わる教育課程が改定となり、それに伴い保育士の教育課程の一部が変更となった。そのため、科目変更が生じたことにより再履修が困難となることが予想されるので、履修指導を徹底していくこととなった。

「教育方法」

(1) 教育方法および学習指導は適切か

・教育・履修方法の基本

本学科においては定員80名の学生がこどもの発達をその支援についての学修を行い、専門的職業人としての幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭、保育士、地域において保育・教育のアドバイザー、コーディネーターとして活躍することができる人材の育成を行う。したがって、学生の希望と志向により保育士資格、幼稚園教諭1種免許、小学校教諭1種免許、特別支援学校教諭1種免許を取得できるように配置されている。

・教育課程の展開

1年次

全員を便宜上40名ずつの2クラスに編成し、所定の教育課程により教育を行う。基本的に教養科目、専門基礎科目において本学科における学修の基礎を培い、免許資格取得を

希望する学生のためには保育士資格、幼稚園教諭1種免許取得に必要な科目を中心に学修を行う。特に、少人数による演習科目「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を前期・後期（必修）2年前期（選択）にわたり履修し、学士力の基礎となる大学生としての学ぶ力、科学的、論理的思考能力の基礎を養うとともに「こども学言論」「知的障害者の心理・生理・病理」などの科目によりこどもの発達とその支援についての基本的考え方を学ぶ。また、アドバイザーによる就学面談指導、各専門分野の教員による生活指導など学修上の指導及び進路指導並びに卒業後の進路についての指導を十分に実施した上で1年次後期、10月を目途に2年次以降の学修方法等の検討についてアドバイザーが学生に対し、十分な支援を行う。

2年次

「地域活動論」「ボランティア活動」「こどもの発達と幼小連携」などの科目により学生は地域への貢献、幼稚園と保育の連携などについて学び、保育、教育、地域活動などについての視野を広げる。免許資格の取得に関しては1年次に引き続き、保育士資格、幼稚園教諭1種免許取得に必要な科目を中心に学修を行いながら、小学校教諭1種免許、特別支援学校教諭1種免許のいずれかを取得するための科目を履修し、学外実習に関わる科目の履修も行う。

3年次

前期・後期にわたり「こども学総合演習Ⅰ・Ⅱ」を履修し、保育・教育・地域活動などからテーマを選択し、主体的な学びにより理論的、実践的能力を養う。各種免許・資格の取得を希望する学生は引き続きそのための科目の履修を行う。免許・資格関係科目の配当の関係で1，2年時に設定しなかった教養科目なども同時に学修を行う。

4年次

教員免許を取得する学生にとっては各種の学外実習が用意され、実社会への巣立つための仕上げの時期となる。「教職実践演習」により教育者としての育ちを確認し、「卒業研究1・2」など4年間の学修の集大成となる科目を履修する。免許資格の取得を希望しない学生は時間を有効に使うことで地域の子育て支援活動などに積極的に参加して将来の活動の基盤の形成ができるようアドバイザーが十分な指導を行う。

(2) シラバスに基づいて授業が展開されているか

・シラバスに基づく授業の展開

各授業は、到達目標、受講条件、授業計画、予習・復習の内容、成績評価方法等が明確にシラバスに記載されている。授業内容・方法は、シラバスとの整合性に留意し、弾力的な進捗状況を図り、受講生の学習効果を高めることを念頭に置いている。

(3) 成績評価と単位認定は適切に行われているか

・成績評価と単位認定の適切化

シラバスにおいて、成績評価方法及び評価基準を明示している。成績評価に疑義がある場合は、一定期間に申立てることができる。疑義の申立てについては、担当教員は明確な説明責任を負っている。また、GPAの適正な運用を通して、学習意欲の増進を図れるように努めている。

(4) 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか

・授業評価と教育内容・方法の改善

前期と後期に全ての授業の授業評価を実施し、教育内容・方法を検証して、各教員が改善点を明確にしている。授業評価における改善点は、授業に反映されている。各教員にとっては、毎年の授業評価を通して、改善点に取り組み、教育力の向上を図っている。

教育方法について、下記のような工夫・改善を行っている。

①基礎ゼミナールⅡ：「統合保育」という課題について学ぶために、恵庭市の幼稚園・保育所において観察実習（参加実習含む）を行った。課題に対する問題点を把握し、理解を深めることができたことが成果である。

②保育者論：グループワークを活用して、保育実技を学び、発表会を行った。実践的な知識の習得や現場の職員間の協力関係など理解を深めることができた。

③教職原論：恵庭市や千歳市の幼稚園・小学校・特別支援学校において、観察参加学習を実施した。その学習をもとに、報告・討論を行い、教育現場に対する理解を深めることができた。

その他、授業に講義形式と学生参加を取り入れる等の授業展開の工夫を行っている。

○ 概況

こども発達学科の学生の多くは、主として複数の教員免許の取得を目指している。そのため、時間割がかなり立て込んできている。基本的にトリプル資格の取得を目指している学生が多い現状では、必修科目の修得に追われて、選択科目の履修者が少数となるケースが生じている。他学科教員等の協力を得て、幅広い選択科目を用意したが、当初の予想に反した結果となっている。

「成 果」

(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか

・教育目標に沿った成果

学科設置から2年を経過した現状において、当初の教育目標である「地域社会における多様な保育・教育ニーズに応え、幼稚園から小学校へのスムーズな接続の問題や、障がいを持つ子どもや扱いの難しい子どもへ専門的なケアをすることができる人材の育成、高度な能力をもつ保育者・教育者の養成」に向けて様々な取り組みが行われている。

特に、こども発達学科においては、実習や教職関係で顕著な成果を上げることができた。

①『保育実習・教育実習ハンドブック』の作成

このハンドブックは、こども発達学科の全ての実習に係わる指導・課題を細かく記載し、実習に臨む学生が実践的に利用できる総合的な手引書となっている。従来、本学ではこの種のハンドブックがなかったことを考慮すれば、画期的な手引書である。今後、実習に積極的に活用していくことになる。

②教職履修の道筋・カルテ『生命の若木』

『生命の若木』は、教職課程における授業への取り組みや、学外・校外実習等での活動が充実したものになるよう、4年間の学びと資質獲得の道筋を記録していくものである。

この記録が、4年次後期に学習する「教職実践演習」へと繋がり、教育者としての人間性や実践的指導能が身に付くことが期待できる。

③アシスタントティーチャー

小学校教諭・特別支援学校教諭を志望する学生が、アシスタントティーチャーとして、恵庭市内の小学校に週1～2回訪問し、教員としての経験を積んでいる。その経験を授業に生かして、教員としての資質向上を深めている。

今年度のアシスタントティーチャーを終えるに当たって、『アシスタントティーチャーを終えて』というレポート集が作成された。そのレポート集から、1年間の学生の成長をみることができる。

④教員採用候補者選考検査に向けての講座

本年度より2年生を対象に、5月から選考検査に向けての対策講座を実施している。教養検査・専門教科・学習計画・模擬授業・面接等、総合的観点から学生の基礎学力の向上を目指している。学生は、着実に基礎学力を伸ばしている。

⑤文教ペンギンルーム（子育て教育支援センター）

地域の乳幼児をもつ親や子ども同士の交流の場として、また将来こどもの教育に携わりたいと考えている子ども発達学科の実習や研修の拠点として、この施設は開設された。こどもの関係力を育むプログラム、地域の保護者や子どもたちのふれあいのお手伝い、子育てに関する相談活動、公開講座や特別講演等、各種のプログラムを企画・実施している。

⑥チャレンジド・スポーツ教室

「チャレンジド・スポーツ教室」では、学生が主体的に障がいのある子どもたちとスポーツ活動とコミュニケーションを組み合わせることで交流を図り、子どもたちの社会性を育みながら、保育と教育の実践的な学びを深めている。

⑦メンタル・フレンド派遣事業

ひきこもり・不登校等の児童・生徒のために、恵庭市内の大学生等（メンタル・フレンド）が、スクールカウンセラー等の助言・指導もとその家庭を訪問し、話し相手となり「ふれあい」を持つことにより、自主性・社会性の向上を図る事業である。子ども発達学科の学生もこの事業に参加し、問題行動の実態を把握し、実践的な問題解決能力を身に付けていく。

○ 概況

教育課程は、設置計画を着実に推進している。また、3年次の「子ども学総合演習」においては、担当教員が幼保系に偏る傾向が見られたので、小学校系、特別支援学校系の専任教員を補充し、内容の充実に努めている。

2. 点検・評価

(1) 効果が上がっている事項

教育目標でもあった地域と結びついた教育実践という課題が、この2年間で着実に実を結んでいるというということが大きな成果である（前述「成果」の(1)）。授業においても、地域の幼稚園・保育所・小学校との交流が、基礎ゼミナール・保育者論・教職原論等の授業において、観察実習（参加実習含む）を通して活発に行われている。授業外でも、前述のように文教ペンギンルーム（子育て教育支援センター）、アシスタントティーチャー、チャレンジド・スポーツ教室等の活動を通して地域との結びつきを深めている。

(2) 改善すべき事項

多くの学生が、資格取得を目的として入学している。四つの資格（幼稚園・保育所・小学校・特別支援学校）に関わる授業が展開されている。こども発達学科では、トリプル資格の取得を基本としているが、進路選択の面で学生に迷いが生じているのが現状である。履修モデルを提示し、学生の履修に対する理解を深めるよう工夫をしているが、なお一層の努力が必要である。

3. 将来に向けた発展方策（H24年度の目標）

(1) 効果が上がっている事項

地域と結びついた教育実践は、さらに推進を図っていく。今後は、保育所実習、幼稚園教育実習、小学校教育実習、特別支援学校教育実習等の実践的な教育活動をとおして、さらに地域のとの絆を深めていきたい。

(2) 改善すべき事項

学生の進路選択に伴う履修指導の徹底を図っていく。学生が自らの将来像を描けるように、担任・アドバイザー制度を活用するように指導していく。学科教員全員の協力を得て、教務委員・就職支援委員会を中心に学修上の指導及び進路指導に関する課題の検討を進めていく。また、オープンキャンパス等での広報活動も活発に展開する。

4. 根拠資料

(1) 「教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針」

- ①こども発達学科設置認可申請に係る再補正申請書（第8章：設置の趣旨等を記載した書類）
- ②2010・2011 学生便覧及び人間科学部シラバス
- ③北海道文教大学ホームページ

④こども発達学科履修モデル（1・2年）

(2)「教育課程・教育内容」

- ①こども発達学科設置認可申請に係る再補正申請書（第8章：設置の趣旨等を記載した書類）
- ②2010・2011 学生便覧及び人間科学部シラバス
- ③北海道文教大学ホームページ

(3)「教育方法」

- ①こども発達学科設置認可申請に係る再補正申請書（第8章：設置の趣旨等を記載した書類）
- ②2010・2011 学生便覧及び人間科学部シラバス

(4)「成果」

- ①文教ペンギンルーム（子育て教育支援センター）：文教ペンギンルーム（毎月刊行）
- ②アシスタントティーチャー：平成 22 年度北海道文教大学「アシスタント・ティーチャー・プログラム レポート集」
- ③チャレンジド・スポーツ教室：北海道文教大学チャレンジド・スポーツ教室「学生の心を拓き耕す・平成 22 年度の軌跡」

こども発達学科 自己点検評価実施委員

役名	氏 名		
委員長	教授	佐藤 信雄	学科長
委員	教授	鈴木 貢	大学評価委員会委員